

きなこちゃん

—駄菓子作りに生きる—

駄菓子と呼ばれる菓子があ
る。ごく、ふだん着の
ごくねだんの安い
おいしい菓子である。
子どもたちは昔から、路地裏
で駄菓子を食べて大きくなり、
駄菓子は、子どもたちにたべ
られて広まっていった。
愛知県名古屋市。
ここで、懸命に駄菓子を作っ
ている人たちがいる。
その菓子を、全国に売ろうと
頑張っている人たちがいる。



三宅武夫さんは、旅出し専門の小
物問屋・港屋商店の五代目社長であ
る。その三宅さんが、命のつぎに大
切にしているバッグがある。
このズシリと持ち重りのする大き
なバッグを手に、三宅さんは月のう
ち三分の一を旅に暮らす。北海道、
東北、東京、ときには九州や四国に
も足を伸ばし、問屋さんを訪ねては
注文をとる。三分の一というのは、
社長、専務、常務の三人が順ぐりに
営業に歩いているからである。
そのバッグの中にぎっしりとつま
っているのが、次ページの写真のよ
うな商品見本である。



■山田勝彦さん 51歳

目をこらして見てください。

これが、三宅社長が秋から冬に売
る「菓子」の一部。メーカーがそれ
ぞれの思いをこめて作った数々だ。

昔からの菓子もあれば、今シーズン
が初お目見えという菓子もある。

ただ、この菓子がならばのは、デ
パートでもスーパーでもコンビニで
も、パン屋でもない。

駄菓子屋さんの店先である。

三宅さんは、業界で「小物」と呼
ばれる、一つ30円以下のお菓子を扱
う菓子問屋なのである。旅出しとい
われるのは、卸し先が地元でなく、
全国にわたっているからだ。

ここ名古屋には、港屋さんのよう
な問屋が50軒はある。少ないようだ
が、これはけっこうな数だ。では、
なぜ名古屋に、こんな問屋さんが多
いのか。名古屋こそ、駄菓子のメー
カーが、大小とりまぜ、ざっと五百

社近くも集まっているからである。
それも、港屋のある西区押切町あた
りがメッカ中のメッカだ。

今日も、美濃街道に面した港屋さ
んの事務所に、やはり押切町に本拠
をかまえる、ひとりの菓子メーカー
の主人が訪れた。ヒット商品「きな
こちゃん」を生み出したヤマヨ製菓
社長・山田勝彦さんである。ヒョロ

リと細高い彼こそ、私が名古屋でぜ
ひ会いたかった人である。



というのも、「きなこちゃん」は
おが娘ともども、ごひいきの駄菓子
なのである。近所にある駄菓子屋さ
んに商品が入るたび、二人で見つけ
ては買ってくる。油断をすると、す
ぐなくなってしまうからだ。

桃太郎にサル、イヌ、キジの絵が
ついた袋をあけると、プーンときな



■三宅武夫さんと山田さん 三宅さんの名刺
には、〈玩具問屋〉港屋商店と書いてある。
これは、アテモノや玩具も扱うからである。



■きなこちゃん 4個入り30円

粉が香り、小さな餅が顔を見せる。
この「きなこちゃん」の香ばしい香
りと嫌みのない餅の味は、最初、た
かが駄菓子、と思っていた私の予想
を、見事ひっくり返してくれた。し
かも、うれしいことに3個20円(こ
の冬から4個30円となった)と、ほか
の駄菓子のように、きっぱりと安い
のである。

いったい、どんな人がどんな思い
をこめ、どんなふうに乗っているの
だろう。知りたい。娘と駄菓子屋さ
んに行きたびに、その思いは、しだ
いに強くなっていった。

そしていま、その人が目の前にい
て、三宅さんの顔で笑っている。